

説教分析の司会を担当して

約28分。永町牧師の説教の時間です。説教後、直ちに分析に入りました。第一の作業は、「第一印象」を集めることによってなされます。分析者たちは、それぞれ教会の聴き手になったつもりで説教を聴きます。教会の聴き手としてどう聴いたかという経験を分析に用いるのです。私は、司会者として、今後の議論を深めるために「第一印象」をメモしました。説教セミナーの様子が伝わることを願って、ここに記しておきます。

「みことばが聴きたい」、「自分は登場人物の誰かな?」、「聴きやすかった」、「教会の人は、好印象を持つのでは」、「わからない」、「たんとと語っておられる」、「やさしさを感じる」、「だれかな」、「解說的」、「鋭さが消えた」、「体験談」、「穏やか」、「聴きやすかった」、「テキストの異様さが消えた」、「いろんなこと」、「やさしさ」、「主の言葉が、聴こえない」、「人間的」、「アピールが足りない」。

第二のこととして、私が考えていた選択肢は、「第一印象を掘り下げる道」、「導入を分析する道」、「説教が語り損なっている部分へ直行する道」、「神の名による言葉を分析する道」です。これらの中から、どれを選択するのか、その判断が司会者に求められます。注意しなくてはならないのは、「第一印象」を深める選択は、扱い方を間違えると却って説教の急所を外す場合があるということです。しかし、そのことを踏まえた上で、私は、「第一印象」を掘り下げる道を選びました。

「第一印象」の中に、肯定的なものが、いくつもありました。よく整理された丁寧な語り口の説教であり、聴き手にわかりやすくという説教者の深い配慮があるからです。これらは、永町説教のよいところですが、そのことを十分に認めながら、しかし、折角の分析の時間です。「みことばを聴きたい」、「解說的」、「鋭さが消えた」、「テキストの異様さが消えた」、「主の言葉が聴こえない」、「アピールが足りない」という「第一印象」に注目しました。それぞれ表現は異なっていますが、同じ方向を指し示しているように思われました。重大な問題が、この奥に潜んでいると予測し得たからです。これらの「第一印象」を足がかりにして、急所へ向かうルールを敷けるのではないかと判断しました。残念ながら、ここで説教そのものを辿りながら、分析を再現する紙幅はありません。その中で特に重要なものだけをここに残しておきたいと思います。

「みことばが聴きたい」、「鋭さが消えた」、「テキストの異様さが消えた」…。聴き手がどうしてそのような「第一印象」を持ったのかということが重要です。聖書そのものが、本来語ろうとしていることを説教において語り損なっている可能性があるからです。

説教を分析する際、説教の言葉の背後を読む必要があります。説教者が語るに至った理由と目的が必ずあるからです。その理由や目的に迫り、その言葉を語るに至った流れをつかむことが必要となります。同様に、今回、私が意識したことは、「なぜそのような第一印象、あるいは批判をすることに至ったのか」、その理由を探ることでした。批判をすることは容易いのです。そのため、批判の根拠を引き出し、その指摘が本当に正しいのか。また指摘が正しい場合、説教者が、その批判を受け入れ、納得できるような語り方をしているのか。説教者の助けになるような改善提案は何か。これらのところにまで議論が進んでいくことを課題といたしました。

「第一印象」から掘り下げる議論が、一段落したところで、今回の鎌倉セミナーでの重要な課題とな

っていた「導入」の問題に向かうことにしました。

扱われたテキストは、マタイによる福音書第9章9～13節です。説教自体の「導入」は、ファリサイ派と徴税人の説明から入るものでした。説教者は、事前に丁寧な説明を施した上で、テキストに入ります。前半は、登場する人々を4つに分類し、登場人物を素描しながら進む構造を持っていました。「『導入』において、説教の全体の構造というのは見えてしまう」とセミナーの中で加藤先生がいわれていたとおり、「導入」において説明がなされる流れは、説教全体に対しても支配的であったことがわかりました。

「導入」では、説教の聴き手に、これから語られる言葉を聴いてみたいと思わせる必要があります。したがって「導入」が聴き手を神の言葉に引きずり込むものになっているか。主イエスを紹介する招きの言葉が聴こえる響きをもっているかを問いました。

「導入」の分析を終えると、終わりの時間が迫っていることがわかりました。「神の名による言葉」を分析することはできないまま、最後に加藤先生からコメントをいただき、説教者である永町牧師からも一言いただき説教分析の時間は終わりました。

今回、分析の担当を通して、私は大切なことをいくつも知ることができました。分析の際、議論は待たずに進みます。そのため司会者は、説教を聴き終えた時点で、全体の構造を把握し、聖書学的な視点を持ち、かつ教義学的な分析をしながら、急所を見つけ、議論に備えていなくてはならないということです。議論をよく聴き、説教者の成長につながる批評であるかどうかを素早く判断することも大切なことでした。議論を見極め、深く思考しながら、次のルールを敷く瞬発力が必須であることを痛感しました。また、批評の際、重要なことは、語られた説教の言葉自体に基づいて語るということです。そうでないと、議論が抽象化してしまいます。司会者は、説教の言葉をきちんと踏まえるようにと全体を導く必要があります。そのことも大切な役割であると改めて思いました。

私が担当した永町牧師の説教は、誠実な準備に支えられたものであり、構想が練られ、何度も読み直した跡のわかる水準の高いものでした。説教を提供くださった永町牧師に心から感謝をいたします。